



淡き筋ぞよき——水原秋桜子の晩年

平井照敏

水原秋桜子が亡くなられたのは、昭和五十六年七月十七日のことであつた。八十九歳の高齢ではあつたが、これは俳句史のなかの重い出来事の一つであると思い、その夜、

師の師逝くその夜のたたきつくる雷

などの句を作ったことをよく記憶している。直接お目にかかったことは一度もなかったが、私の師は加藤楸邨であつたから、自分の師の向う側に、師の師として、いつも想定し、感じていた方だったわけである。その秋桜子の晩年の句境をさぐるべく、逝去の前十年ほどの間の句を眺めてみることにしたい。

秋桜子は、昭和四十六年九月に、第十八句集の『緑雲』を出しておられる。このあたりをとりあえずめどとしておきたい。この年から没年までの大略の出来事は、次の通りである。まず、狭心症の発作をおこして、東京女子医大病院に入院したが、昭和四十八年九月十三日のこと、退院は十二月であつた。翌昭和四十九年一月には、丸の内の日本工業クラ

ブで、「馬酔木」の六百号記念俳句大会がおこなわれている。島原や雲仙を周遊したのは、昭和五十一年五月のことであり、昭和五十二年十月には、第十九句集『餘生』を刊行している。この年はまた、講談社から『水原秋桜子全集』全二十一巻の刊行がはじまった年でもあつた。昭和五十三年二月には、昭和三十七年から続けていた俳人協会会長の職を退いて、名誉会長に就任している。昭和五十四年十月には、第二十句集の『芦雁』を刊行するが、まもなく十二月四日、再度の狭心症の発作をおこし、東京女子医大病院狭心症センターに入院する。退院は翌年の昭和五十五年三月九日で、自宅に戻つた。六月に主宰誌「馬酔木」の名誉会長になつたのは、身体の衰えを十分に自覚したためだったのかもしれない。そして、冒頭に記したように、昭和五十六年七月十七日の午前三時、急性心不全のため、自宅で永眠されたのであつた。馬酔木会と俳人協会の会同による告別式が青山葬儀所でおこなわれたのは、八月二日のことであつた。

以上が秋桜子最晩年の動静の概要である。なにぶん、七十九歳から八十九歳までという老齢のこと、病氣のことや隠退のことといった内容が目立つようだが、そうしたなかでこつこつと、『緑雲』、『餘生』、『芦雁』という三冊の新句集をまとめていることは、秋桜子の勤勉さをいかにもよく印象づけている。三句集とは言ったが、実際のところでは、『芦雁』以後の句がもう一冊分のこされたわけで、それがいま、最終の第二十一句集『うたげ』としてまとめられたところである。夫人があとがきを書いている。この『芦雁』以後の句は、やはり「馬酔木」に発表された作品が中心になるわけだが、その秋桜子最後の作にあたる、昭和五十六年八月号の「馬酔木」掲載の遺作が、死後しばらくしきりと話題になつた。新聞にもとりあげられたりして、おどろくほどにぎやかだったが、

紫陽花や水辺の夕餉早きかな
紫陽花や鱸用意の生簀得て

飛魚の翔けて人よふ伊豆の船

の掲載三句のうちの第一句が「や……かな」を同時に用いており、切字二つを使ってはいけないという俳句の禁止事項の常識が守られていなかったからであつた。このとき、この句の場合には「や」がかかる使われていて切字というほどのものではなく、作者は淡々と思ひつかふ情景をたどつていっただけだというような同情論などいろいろに言われている

だが、やはりなんとなく、秋桜子最晩年の衰えの現場を眺めたという印象を受けた人が多かったようである。私自身は、切字二つはいけないという経験則を、絶対的な法律のようにしてきざぎざでたてた伝統俳人の言説をどうかと思ひ、中村草田男の切字二つの名句、「降る雪や明治は遠くなりけり」を思ひあわせたりしてみたが、私の関心はそれよりも、秋桜子が最晩年に、第一句集『葛飾』の世界を思ひかえしていることにむけられていて、そのことに感動したのであつた。『葛飾』の中の、「真菰刈る童に鳩は水走り」や「葛飾や浮葉のしるきひとの門」のような句が私の中に生きていて、「紫陽花や水辺の夕餉早きかな」を詠むと、それらの句がすぐに連想されたのであり、それは秋桜子にも同じことだつたと思われたのであつた。

いま私は、秋桜子最晩年の句について、それが発表された頃の思ひ出を記したが、それは死直前という時点でのこと、頭脳明晰だった秋桜子は、結局、終始一貫明晰に人生を過した人と思われる。だから、俳句に対しても、最後まで完全主義のきびしさをゆるめることがなかったように思う。それはもう人柄だったのであるまいか。『緑雲』、『餘生』、『芦雁』以後（『うたげ』と、晩年の四つの時期の作品を眺めて、私は、秋桜子が選択決定した最後の句集『芦雁』にもっともよい作を見出すように思うのだが、その『芦雁』の後記には、「病後五年間に、この倍数ほどの句は詠んだが、半ばは捨ててしまった。老年の句は力が不足して、我ながらあ

角川源義の俳句
精神を継承する



主宰 角川照子
副主宰 角川春樹

—新会員募集中—

誌代 半年4,500円
送料共 一年9,000円
見本誌500円(切手可)

河発行所

〒167 東京都杉並区荻窪3-14-22
電話03-391-6376 振替東京3-55623

はれに見えたからである」とあるのである。このようなきびしい選句力がある限り、俳人は必然的に来る老齢による衰えにも、抵抗することができらるだろう。そしてそのようなきびしい自省の眼を示した『芦雁』の中には、

水羊羹 喜劇も淡き筋ぞよき
塩鮭の塩きびしきを好みけり

のような、私の好きな句、そして、晩年の代表作ともいえそうな二句がおさめられているのである。

ふつう、秋桜子晩年の句といえば、『緑雲』から、

綿虫のおのおの行手ある如し
蛤のひらけば腕にあまりけり
蜻蛉うまれつばさひかりを得つつあり

などを、『餘生』から、

釣瓶落しといへど光芒しづかなり
余生なほなすことあらむ冬葛
老ふたり病むを見たまふ難のあり

などを抜き出して眺めるのが普通だろう。優艶に静謐に、金箔を敷きつめたような、滋味のある句だと私は思う。そのような句に比べて、『芦雁』はすこしちがいのある句集のようである。この句集については私の選句を全部記しておこう。

牡丹浄土舞ふ蝶のみを許しけり
驚草の驚立ちすくみ雷せまる
謝春星まつりて終に医を嗣がず
水羊羹喜劇も淡き筋ぞよき
蛸のこる不思議さに水澄みにけり
白菜鍋朝より仕込む冬ごもり
手折りても霧をまとへり女郎花
塩鮭の塩きびしきを好みけり
ローランサンよき画家なりき初暦

これらの九句を『緑雲』や『餘生』の句と比べて、すこしちがうなあとと思うところがある。それは、『緑雲』『餘生』の句が、「行手ある如し」「得つつあり」「光芒しづかなり」「余生

なほなすことあらむ」などと、どちらかといえば、にじみ、ぼかしを使用して、婉曲に表現しているのに対して、『芦雁』の右の句は、「舞ふ蝶のみを許しけり」「終に医を嗣がず」「淡き筋ぞよき」「塩きびしきを好みけり」「よき画家なりき」と、むしろ積極的に、つよく、断定的に、句をまとめているのである。この『芦雁』という句集は、昭和五十年のはじめの「潮けぶりこめても初日さだかなり」から、昭和五十四年六月の「紫陽花は七変化^{へんげ}沢瀉^{ざさ}は十変化」までをおさめているもので、昭和四十八年と昭和五十四年の二度の狭心症の発作の時期にはさまれた、晩年の充実した積極期の仕事だったのかもしれない。『芦雁』以後になると、

けふ冬至余生こたびはいかならむ
菊の鉢移せよ日向移りける
泉の影花にあり燈を消さむ

そして、例の「紫陽花や水辺の夕餉早きかな」ほか二句のよ

うな、不安げな、静止回顧的な句になってしまっているのである。「泉の影」の句には、前書があり、「東大病院当直の追憶」となっている。この句も回顧の句であることがわかる。

選句をもとにして眺めると、このように、『芦雁』は、秋桜子晩年のもっとも活気ある句集であったといえる。その句の幾つかは、秋桜子のもっとも本質的な部分を直接に主張してさえている。すなわち、

牡丹浄土舞ふ蝶のみを許しけり
謝春星まつりて終に医を嗣がず
塩鮭の塩きびしきを好みけり

などは、美の完全主義者であった秋桜子の内面をはっきりと物語っている。そして、第一句の「舞ふ蝶のみを許しけり」は、第三句の「塩きびしきを好みけり」とびたり符合する表現だろうと思う。それにしても「謝春星まつりて」の句はおもしろい。水原家の家業でもあった医の業を捨てて俳句の

世

主宰 伊藤敬子

初心者歓迎
新入会員募集
誌代(送料共)
1年 8,400円
半年 4,200円
1部 700円
(見本誌 500円)

〒465 名古屋市中東区
神丘町2-51-1
東海俳句懇話会 笹発行所
電話 052-701-5050
振替 名古屋2-45044

道にかかわったのだが、祭ったのが芭蕉桃青ではなく、謝春星であつたというのが、やはり美の狩人である秋桜子らしいなと思う。俳句を文学に高めようとした子規も、俳句を芸術に深めようとした秋桜子も、ともに蕪村にその革新のエナジを求めたのであつた。「ローランサンよき画家なりき初暦」という洒落た句も、この一筋につながっている句だと思ふ。このあたりが、波郷、楸邨と根柢からちがう秋桜子の美志向の実態なのだが、そうはいっても、秋桜子は芭蕉を捨ててかえりみなかったというわけでは全くない。かれは芭蕉をも蕪村をもよく学び、よく摂取したが肌が合ったのは蕪村だったということなのだろうと思ふ。これらの句にたいして、

水羊羹 喜劇も淡き筋ぞよき

は、生来の好みを言っているのかもしれない、また、老いてますます強まった好みであつたのであるまいか。もつとも、この句、一句だけを切りはなして眺めると、よけい意味深長に見えるが、句集では、「紀国屋船乗込」という題にまともめられた八句の中の七番目の句で、そのようなコンテクストの中で読むべきものなのかもしれない。次のような連続である。

風鈴や船乗込の噂して

船乗込待つやなびける夏柳

船乗込待つ絵団扇や小棧橋

橋あまたくぐりて涼し囃子舟

船乗込もどる囃子や鰯雲

鰯切りの庖丁研ぐや祭前

水羊羹 喜劇も淡き筋ぞよき

雷嫌ひ宗達の絵も祓ひけり

かつて新興俳句勃興期の連作俳句のリーダーであつた頃をしのばせるような、勢いのある句の配列というべきであろう。

たとえば、「綿虫のおのおの行手ある如し」(『緑雲』)もよいし、「余生なほなすことあらむ冬母」(『餘生』)もよい。それらはたしかに完成度の高い秀吟である。しかしどこか不安気で、手さぐりという感じなのだ。これらに比べて、『芦雁』の句は、たしかに張っていて、勢いがあり、秋桜子の最晩年の小春日の蒼天のような、高揚期の句であつたようである。狭心症の最初の発作から立ち直り、充実した生を心掛けたのかもしれないが、二度の狭心症発作、入院、退院にはさまれたこの『芦雁』の期間は、秋桜子にとって貴重な充実のときだったように思ふ。張っていて、積極的な句作であつた。この時期の過ぎたあとは、「けふ冬至余生こたひはいかならむ」のような、弱った、不安なところになつてしまふのだった。

〈追記〉

山本健吉氏が最近、秋桜子の芸境にたいして与えられた「きれいな寂」という評語はなるほどと思われる。日本文化の美の一流に秋桜子がつながることをあざやかに示している。神田生まれの江戸下町っ子の熟した芸境は、やはりきれいな寂に達するものだろう。芝居好き、美術好き、焼物好きの秋桜子は、やはり、蕪村に、宗達に、琳派につながる人であつたのだろう。改めて考えてみたい。

●特集・晩年の句境

初心透徹

大野林火晩年



宮津昭彦

大野林火の作品に「晩年」の語がみられるのは、

皆晩年冬日黄なるに撮られけり (『雪華』)

からである。昭和三十六年作。そして、翌年には、

炎天に怒りおさへてまに老うも (同右)

がある。そしてこの句の自解の言葉に、「私の句に、さきに「晩年」の語が入り、まに「老う」の語が入るようになった。還暦にはまだ二年余したが、忍び寄る老いをときに意識するようにになった」が見られる。この言葉はさらに続いて、「そのことは私に、三十八年十二月刊の『戦後秀句』のあとがきに「筆者註、この書にとりあげた諸家が」いかにして、老いに「対応しているかを学ぶ」ことも課題の一つと書かしている。」となる。

この「あとがき」の言葉は、林火を語る場合、引用されることが多い。これほどはつきりと「老い」を迎える覚悟を語った俳人はまれだからであろう。六十を「老い」の入口と見定め、その奥につづく歳月をどのように生きるか、晩年意識がひとつの問題として強く自覚された時代だった。

還暦の近しや月夜葉が落つる (『雪華』)

鯖漁る火命惜しめと沖に殖ゆ

老いゆくを知れとて長き夜はあるか

期すものに老後も初心水澄めり

いずれも還暦前後の作だが、その経緯が影を濃く落として

いる。この強烈な晩年意識のなかで作句活動はいよいよ充実し、『雪華』の「あとがき」には、「この句集、後半ややわが道を得た」の語をとどめさせている。「わが道を得た」ことを如実に語る作として、ここではつぎの一句をあげておきたい。

花ほつほつ夢見のさくらしだけけり (『雪華』)

この句には、「さくら本坊主、庭前の桜につき、吉野宮に在りし大海人皇子夢見の故事を説く。事は問はず、ただそのさくら美しければ」の前書があるが、後半の部分と一句が照応して眼前の桜に限りなく情をそそぎ、桜とひとつになつて